

なく。兄を大事とッ育つれども。繼子の足を打折つて不具にしたと世の中の。雑口に戸はたてられず。繼母が繼子憎むといはれては第一夫の恥。父御の石塔卒塔婆に迄恥與ゆるも本の子ゆゑ。何とぞ家を出さんため。母が目をねむつて態と己れに悪性つけ。勘當はしたるぞや五人十人ある子さへ。親の因果に一人も捨て度いと思ふ子は無きに。況して一人の子を捨てしは夫のため兄がため母も道を立てんため母が道さへ立つならば。己れも人の憐みありよも辻門には立つまいと。こゝを思ひかしこを思ひ己れを勘當してよりは。一夜も泣かずに寝た夜はなく母は壽命を縮むるに。己れは盗みに夜を明かし。母とも思ひ出すまいと。ッ聲を。あけてぞ泣き給ふ。聞けば江戸の遊女の腹に男兒もあると聞く。其の根性では妻子にもさぞ辛からう。地盗みも妻子の爲ならば憎い内にも哀れもある。身に着飾つて騙事せよとて親は生みつけぬ。情なの性根やと足駄押取り四つ五つ。丁々と叩き付け今は打つても叩いても。此の恥は雪がれずと足駄をからりと投棄して。かつばと伏して泣き給へば憲法は涙にくれ。兄もとかうの言葉なく。親子三人聲を上げ。ッ人目も。恥ぢず泣きゐたり。大炊之助涙を抑へ皆我等への御仁心。とかう申し上げ難しなう憲法。地言譯あらば申し上げ。序に御勘當の御免を受けてたべと

言へば。憲法泣くく言葉返すは恐れながら。龍門一家の人々兄上の足の不具を摘にし。嫁御諸共追出さん殺さんなどの取沙汰。地承る折しも忠節の下人某をみつぎのため。御道具とも存ぜず不慮に取つて歸りし故。幸と身に着し大炊之助と假名をし。命を捨てて家を鎮め其の後に心安く。聲入なさせ申さん爲の誠の心。却つて不忠と罷成る。境涯こそは拙けれと。スエテさめぐくと泣きければ。調やれそれを知らぬ母にてなし。龍門一家の人々に其の返答を仕兼るか。唐土の蘇武はな。片足を切られても典屬國といふ位に昇り大國の主となる。地大炊之助もまつその如く。形こそ不具なりとも心に五常備る。己れは手足揃ひても心の底が跛にて。地直なる道を守らぬは五體不具に劣つたり。母が心を無下にして。今日の我が儘言語道斷不孝者。兄の出世を見る迄は親子の対面叶はず。そこ立つてうせぬかと愛想なけに叱られ。しをくとして立出づる大炊之助つと出で。弟御免なき事某が身に取つて。有難しとは申せども彼が心底不便千萬。詞理を非に拵けて御免を願ひ。御承引なきならば在るにかひなき不具者。地某切腹仕ると胸押寛け。既に刀を手にかくる母は驚き縋り付き。御身が義理に弟を勘當するで更になし。草葉の蔭の父上へ母が立つる夫婦の道。詞お事に今腹切らせ冥途の父と此の母が。二世の縁を切ら

するか地思ひ止れ大炊之助。まだ出て失せねか憲法と兄を宥め弟を吐り。心を碎く親の氣に逆ふまじと出でて行く。地やれそちには子が有るぞ母が爲には孫ぞかし。孫迄は勘當せぬと残す言葉に憲法は。物をも言はず手を合せ。伏拜みく。オクリ行き方へ知らず。フシなりければ。地兄は母に抱き付き。前後不覺に歎きしは。フシ。理過ぎてあはれなり。地姑は始めより物をも言はず居たりしが。詞ハア、誤つたり我が心。繼母は同じ繼母にて彼方は佛我は鬼。目の前の地獄極樂の此處に有るとは知らなんだ。繼子を憎い嫉しいと。さもしき心に一大事の胸の蓮華を汚したか。地如來に懺悔申すからは各も今迄の。科を御免と泣き口説くフシ一念發起ぞ誠なる。地時に奥より女房達なう情なや妹君。和琴の姫様身を投けるとの書置して。御行方はなしと云ふ母は心も狂亂し。それは誠か夢なるか追手をかけよと奔いて。奥を指して駈入れば大炊之助も覺悟を極め悲しきかなや一人の弟には生き別れ。姑一家に敵を持ち剩へ只今の騒動は何事ぞ。詞時節到來とは言ひながら。大炊之助が一生の身の固めの今宵しも。地かゝる災難諸佛の教は何時の時をか期すべきぞ。御免候へ母上と指添抜いて黒髪を。ふつつと切つて西へ投げ棄恩入無爲とは申せども。野山の末迄御供と既に出でんとせし所へ。詞舍人總馬大勢引具し込み入つて。ヤア跛め

出家とは好い分別。兩足の長短よい加減に切つて捨て。首打落し跡先を揃へてくれんと思ひしが。兵法遣ひの憲法めが歸るを待つて遅なはり。生けて返す残念ながら。坊主首は取られまいはや歸れとぞ罵つたる。地舞樂の前は憧れて母諸共に走り出で。家の主と迎へし人一夜も館にそなへもせず。御出家とは情なや此の上は我々も。一所に伴ひ妹が行方も共に尋ねんと。走り寄らんとし給へば舍人大勢かけ隔て。詞ヤ、ならぬく。別々に退かば退け一所にやつては後むつかし。地寄つて見よと鑓長刀閃かいて隔つれば。地姑は大聲あけ我も悪心翻す。目前の哀を見て其の振舞は何事ぞ。妻子珍寶及王位天子の位も捨てて行く火宅の娑婆にあさましい家も所領も惜しからず。今迄憎みし繼娘思へば後世の導師なり。いざ一蓮と手を引けば大炊親子も手を取つて。西と東に立別れ互に交す教化の詞。會者定離愛別離苦。常寂光の都あれば國郡も惜しからず。瑤瑤莊嚴の衣には綾も錦も代へ難く。網代の輿より乗物より大白牛車こそ乗りよけれ。邪正一如善惡不二思ひ切つたり思ひ切れ。煩惱の表門菩提の裏門も一つ。さらばと別れ出でけるが三十二相備はれば。此の世の跛も恥ならず笑ふもよしや是見よと。猶足びきの大和路や山路を。わけて。三夏木立。フシ左近の櫻。散り残る。地御垣原の時鳥ほどを知らせ

て大内の。衣がへの御遊とて。十二番の御能組南殿の正面に。假舞臺をしつらひ掃部寮より陣の座迄。樂屋口は二重幕。御簾の内には主上を始め奉り。女御更衣十二の局三公親王月卿雲客。武家は白洲に膝を折る中にも大和の國龍門は。警固の當番たるによつて。叔父遠坂舍人裝束改め。家の侍宮中に杖振廻し警固する。洛中洛外豫てより拜見の札を頂戴し。女は東男は西御門御門に詰めかけて。俗は上下法體は衣を着し笠頭巾。きせぬ頭も丸腰に刀脇指小刀迄。刃物を固く禁制は民を憐む明王の。芻蕘の者雉兔の者。悦ありや此の所外へは。やらじと。三重面白き。フシ面も黒き。地三番叟鈴も終れば脇能を。謠ひ出せる尾上の松老木の母に別れてより。名字も吉岡憲法と四條西の洞院に。身をいにしへに染物屋好みを求め忍びるて。妻子の行方を尋ねんため。今日のお能の雲井の庭。フシ諸人に交りたりけり。地舟越總馬立廻り。宮中なるぞ扇かざすな手をかざすな。頭が高い低うくと棒振廻しちらと見付け。詞ヤア彼奴は憲法地いづぞやの遺恨あり。天狗を働く兵法も丸腰は女同然。よい撲ち所とさあらぬ體にてこれく頭が高い。詞此の頭が高いわと杖の先にてはたと打ち。地知らぬ顔にて過ぎ行けば憲法はつと振返れば。兄弟意趣ある總馬なり憎し汚し合口一本持つならば。杖を引く間はあらせじ物をと能

見る心もあら磯の。フシ松風もはや過ぎにける。地總馬始に味はひて。いや面白し是ぞ撲ち得今一打と。又振上げてこりや此の頭が高過ぎた。地持ちあぐんだ頭ならば叩き拉いでくれうかと。續けざまに打ちかくる棒先をしかと取り。詞御遊の場なれば堪忍する。邪魔になる頭ならばなんと出て歸らうか。ヲ、長居をして撲たれうより歸つたがまし。地立上れと。言はれても憲法は態としをく諸人の中。御免くと慇懃に御門の方へ立出づる。ウタヒ思ひぞ出づる浦波の聲をしるべに出舟の。知盛が沈みし其の有様に。眼も眩み心も亂れて。前後を忘るるばかりなり。憲法少しも騒がずして。元の所に悠々と地いつ歸るとも白波の。フシ舟辨慶見てるたりけり。地總馬それとは見付けしが面魂の底氣味わるく。此の度は見ぬ顔して通る處をこれく總馬。詞此の憲法が頭が高い。なんとま一度叩いて見ぬかと。地聲をかけられ振返る眞甲を。懷中より一尺八寸拔打に二刀。重ねかけて打つたるは。フシ只電光の如くなり。地すはや喧嘩よ切つたわと男女わつと騒ぎ立ち。雲の上人女官達玉體をかこひ奉り。殿上も大床も上を下へと三重。打返す。地お能の役人逃げ廻り。諸人の中へ亂拍子踏んづ踏まれつ猩々の。亂れ立つたる大勢は。フシ鎮めんやうこそなかりけれ。地奉行の官人聲々に。詞切手は吉岡憲法兵法の達人。大

方にては叶ふまじ諸人を残らず追出し。御門を締めて引つ包み討つて取れ武士ども。地承ると南門開けば數萬人一同に。流れ出でたる其の音はオクリ瀧の〽落つるが如くなり。地やがて貫木しつかとおろし突棒刺股槍長刀。切先揃へかり立つれば思ひも寄らぬ空柱の陰よりも。つとと出で大音上げ。詞禁庭に血をあやし朝家を騒がし奉る。天罰恐ありと雖も遺恨は龍門一家にあり。末世に残す兵法一流の元祖となる。地しるしを見よと切つて出づる只一人に八十餘人。入替へ〽討留めん突止めんと突出す。槍の柄を十八本瞬く間に切り折つて。紫宸殿の大庭を。追つ返しつ半時ばかり手を碎いてぞ。三重〽切立つるフシ手負は數多。我が身には微傷も負はず働けども。鐵石ならねば手も弱り及もさゝらと成つたれば。築地を跳ね越え落延びんと門の扉を後に當て。刀二振槍三本棒三本を相手にして。止觀水月心明劍本來空の夜の霜大極の劍無極の劍今ぞ一世の以心傳心。此の身則ち摩利支天。六臂の切先ひら〽〽ひらり。〽〽の山雀落し門をひらりと躍り越え。行き方知らず隠れ笠。隠れ身の藝身の寶天が。下にぞ残しける。

中之卷

地難波瀧戀の舟着來て問へば。如何なる罪も三軒屋には消えて浮世の榮花町。四國西國引受け

て。かす〽〽迷ふ人心オクリ幾夜〽續けて泊り舟通ふ千鳥や千金の。金は當座のフシ淡路島。手くだの灘を。打越して。碇を下す客もあり。明日も來んとの歌よい手の風に。〽〽その川口漕ぎ離れ沖を乗るてふ。人もあり。所は梅の譽ある。フシ天神。の花の袖。地太夫榮うる姫松や。住吉も程近き御手洗屋の又五郎。則ち廊の年寄にて上下の女郎禿をかけて。三百餘人の色間屋フシ三箇の津にて並びなし。殊に此の頃京都よりの御沙汰として。詞お尋ね者の御詮議一人は禁中にて。人を殺め駈落したる狼藉者。兵法の師吉岡憲法。一人は石川五右衛門といふ強盜。彼等が在所訴人の者は。御褒美を下さるべしと二人が形を圖にあらはし。大判十枚の屬託。年寄なれば又五郎が格子の前に立てらる。見物の貴賤口々にあはれ似た者見付け出し。大判をあたまらうと人々顔をきよろ〽〽と。見らる。者も見る者も互に繪圖と見合する。フシ慾の世界ぞ水くさき。地禿遣手も立ちかゝり。なうお杉殿。あの大きな小判の名は何といひまする。ヲ、あれか。あれは壹歩の爺様といふ物。ム、それが定なら客様達のやらんした。こな様の壹歩も爺に成る迄取つて置いて見さんせぬかと言ひければ。さればさう思へどもこちが手へ渡ると壹歩の壽命が短うなり。地明日は晦日家賃時折角昨夕貰うた。壹歩の最期が近付くとフシと

りどり喚き群集する。其の日の行事五人組町代人打連れて。お觸れ書の通り懇に申し渡し。太夫より端まで頭数二千三百四十五人の傾城人別の。判形相濟み歸りましたと言入れける。年寄又五郎立出で。早速に埒明き御太儀くと帳面披見し。是は扱こちの新造吉野が判がまだすまぬ。なう何れも。此の頃珍しい新造を抱へた。いかさま元は歴々の侍の娘と見えた。器量は十人並なれど心の發明行儀の堅さ。一風あつて位も具はる掘出しかと存する。ちと見て下され遣手ども吉野呼べやと言ひければ。地いたはしや和琴の姫。古への知行所の吉野を今の我が名にて。人の見次第折り次第來て寢次第の木蔭の花。フシ主の前にぞ出でらる。地町衆も手を打つて是は金山白鼠。吉野藏が建ちませうなんでもどつとお積ひには。お振舞の御座舟。フシ吹付けますると羨みける。又五郎も機嫌よく。詞これく吉野あの繪圖の兩人客の内にも知人にも。似た者あらば隠すまい塵一本でも貰ふか預り物でも致さば包ます申し上げんとある町中の連判。印判なくば筆の軸でも印をしやと言ひければ。地年行かねども流石にて是は大事の御詮議。申して返らぬ事ながら。隠して判を致す事の恐しさに申すぞや。詞自らはもと弓取の家。父には後れ自らが母と姉上と。繼しき中のさがくしき母の惡念我ゆると。地吉野川へ身を投

け死にもやらず漂ひしに。あの石川五右衛門といふ繪圖に少しも變らぬ大男。引上げ助け尼にせん法師にせんと。痛はる體にて方々と連れ歩き。詞身に覺えなき叔父とやらんに引合せ。其の方より奉公に抱へられし事なれば。地明さ暗さを其の人に尋ね極めて自らが。今の流れの憂き苦患通れて故郷へ歸るやうに。料簡あつてたべかしと。フシ袂を。顔にさめくと語りも。あへず泣き給ふ。亭主もはつと思ひしがいやく。詞もとは川流れであらうが瓢箪であらうが。肝煎り確に親請人の手形あれば。そちもこちも難儀はかゝらぬ。さうではないかお町衆。尤々來歴を詮議しては禿一人も置かれぬ。地先づとくと合點させ其の上の儀になされ。お暇申すと立歸る主は家の姉女郎。定家小太夫呼出し。詞新造と酒事して。ちと氣を浮かせて煩はすな。随分大事にかけてくれ傾城といふ者は。涙脆うなければ大金には成りにくい。今の涙を見なんだか。袂を顔に押當てて。地はらくくの泣き姿一帯が百兩づつ。黄金涙と悦びて。フシ奥を。指してぞ入りにける。情ある傍輩にて我人此の身に染まりては。辛きに變る事はなし忘れ草には戀と酒。よい戀がな肝煎り度い門へ來る物貰ひに。詞紙衣吉岡とて山谷で口を利いた人。男故に袖乞しても戀が命を結びつぐ。地絃切れ三味の歌の聲今日も來よかし聞かせたい。先づわつと

飲みかけんと勇めても悼はしや。蘭省の花の時錦帳の下。姫君とかしづかれし昔しのぶの軒の下。深編笠の薦尺八聲細々と恨むが如く。慕ふが如く泣く如くオクリ我もユリ泣かする戀慕かや。竹の音色に誘はれて。歌三味線の獅子がよる歌エイソし我も。つまゆる身をやつす。我が中はちかの鹽釜近くて。袖がしほたる、エイソレ近くて。袖フシがしほたる。地在りあふ女郎聲々に。あれ今いうた紙衣吉岡。能い所へ見えなう。いとしや今日は子を負うて。いつもの父御は何として氣色でも悪いか。地虚無僧様も一所に腰かけて一曲。此の新造の慰めフシ頼みますると言ひければ。地編笠越しに憲法はそれと見るより心もくれ。目もくれ竹の尺八のフシ袂紗に涙絞りけり。吉岡も恰好は似たるとばかり笠の内。覗かれもせず問はれもせず餘所ながら身をすり寄せスエテ涙に。心を通はして。ア、皆様はしをらしう親のご迄お尋ねか。地跡の涅槃の名残の雪宵の寒氣を苦みて。夜明の霜と失ひし昨日が三十五日なり。母の爲には身を賣りてとひ弔ひも致せしが。父親には末期迄男ゆゑに苦勞をかけ。目を煩へば手を引かれ孫の面倒見届けて。人となりしも親のかげ今は私が手一つで。三味線弾いつ背中には負うた子よりも抱きしめた。男は是でも忘れぬと。三味線からりと杳脱にフシ身を投げ。伏して泣きければ。虚無

僧も笠傾け。其の座の女郎新造も。道理くとはかりにてフシ共に。袖をぞ濡しける。調いとしやそれでは三味線も身にはしむまい。所望するも心ない。かねぐ内の親方の噂せられし事もあり。地身の立つ談合ありもやせん虚無僧様あの人を。必ずそこに止めてやとオクリ皆々奥に入りければフシ憲法見送り。地人目の隙太夫か我ぞと笠を取る。テ、始めからさう見付けた常闇の世となつても。側に居る男を見違へてよい物かと。夫婦ひつしと抱き合ひフシ又さめ。くと泣きけるが。なう恨みつらみ懐しさ語り度い事泣き度い事。十日や二十日や一年で盡きしなけれど。調方々にて恐しい噂あり。此の町にもあの様に繪圖に書いて詮索は。誰が事ぞお身の地如何にのぶとい氣なればとて。此の人立へのらくくと命知らずといふもの。先づ五年でも十年でも世間の鳴の静まる迄。深山の奥の山里へも親子三人かけをして。遁るゝたけと思召せかういふ中にも身が顛ひ。恐ろしさよと言ひければけに尤至極ながら。調あの石川とは彼の江戸の五右衛門よ。師匠を重んじ我を育む其の間。不慮に盗みを仕覚え今強盗の大將なり。この新造吉野といふは兄大炊之助が小姑和琴の前。五右衛門が誘拐し傾城に賣つたる。其の金とも知らず我は合力受け。樂々と年を取り跡で聞けば。地兄嫁の妹を雜煮よ酒よと飲み食ひし。

恥しき無念させめて心の言譯に。此の廓を走らせんと折々は門に立つ。よし此の事は捨てもせん一錢の貯なき。親子三人山家に隠れ餓死せんも口惜しかるべし。調訴人あつて捕つたに逢はばそれ迄。一天の君の御遊の庭名をあらはしたる憲法が。無手くとは地捕られまいと言はんとすればア、高いくと。夫の口に袖をあてお身に誤無いにして。石川が合力受け同罪遁れあるべきか。殊にお咎め深き身で一夜も手足は伸ばされず。幸と私が古へよりの此の紙衣袖乞せしも名代となり。この主御手洗屋の又五郎殿。床つとめずの座敷の花幫間女郎の合點で。此の子諸共厄介し三年切つて銀二百枚。地今でも談合せんとの事互に無事の便宜を聞けば。三年逢はぬは堪忍なる二百枚の値では。山の奥でもかつくに暮されまいものではなし。妹にして我が身を賣り其の錢持つて何方へも。はやく退いて下さんせあの如く繪圖に書き。屬託か、つた其の中に狼狽へて見付けられ。後悔しても返らうか何とて廣い此の世界。狭いお身には成つたぞとスエテ忍び口説きて泣き居たり。地又五郎夫婦遣手伴ひ立出でて。調ヤア吉岡が親爺も往生せられたけな。かねくもいふ通り其の子の養育男の爲。座敷を勤めるばかりで三年を二百枚。虚無僧何と思召す側から強ひて下されと。いふを折よき幸と申し縁は不思議なもの。互

に昔を語り合へば現在の妹。幼少より散りぐの貧乏神の奉加のため。近日他國仕る銀子も少し入用なれば。地兎も角もといふ詞の中吉岡はおつ取つて。詞いや兄様は急用の旅立なれば。私が身の代今日中にも下されば。我が身も直に勤めません。明日と延びては御相談成り難しと言ひければ。調夫婦悦びそれこそ願ふ處なれ。後とも言はずたつた今金渡さん。地ざつと濟んだ手を打つたさなりくと手を打つて。それ遣手ども吉岡に身仕舞させ。風に合うた衣裳四つ五つ仕立てよ。其の子が乳母を早う聞けフシ先づくと奥へと勇みける。無慚やな吉岡は今逢うて今別れ。いづれも夫の爲ながら急に談合極れば。俄に胸をつくくと男の顔を打詠め。なう此の上は此の所に半時も足を止めず一日路も所を去り。ちよつと自筆の文一つ此の子が事も氣遣はず。只お命を大事にとスエテ涙ぐみたる。面差にフシ男も。心しをくと。肩にかけたる平包是には今の流行染。憲法が手染の小袖そなたに着せんと拵へし。肌に觸れて慰めと投出せば押戴き。朝夕心の力にも樂みにも是一つ。今が本のさらばやと名残惜しさいとしさの。思を昔に染め返し焼き返しては憲法の。戀ぢも弱る黒小袖オクリ泣くくと。ユリと奥にぞ入りにける。地廓にばつと沙汰あれば名高い女郎お抱へと。方々の悦び使揚屋から日を極めに來る。家内の繁昌賑

ひを見るに付けても憲法は。心の内に思ふやう和琴の姫を五右衛門が賣り。今日吉岡を賣る事皆我が爲といふ内にも。吉岡は夫婦合點づく彼の姫廓を出さず。死しても一分立ち難しと思ふ折から又五郎。虚無僧殿いで銀渡さん手形せられよとぞ申しける。憲法亭主の側に寄り。最前は吉岡が聞く前銀子をと申せしが。此方の新造吉野にちと譯の候へば。二百枚の銀よりは吉岡と吉野と。引換へに今日お暇下されば。吉岡が年を二三年も切増すか。お望み次第に仕ら如何様とも御憐み。偏に仰ぎ奉ると思ひ込らる色目なり。亭主夫婦顔見合せて是は變つて見事。幸かな吉野が元の出所明ならず。それ故に町儀の連判も未だせず。出入の無い内。慾を離れて換へもせう。されどもあの吉岡は床を勤めぬ損がある。總女郎同然に異議なく勤めさせんといふ。其方が証文召されうなら如何にも換へてやらんといふ。地何が扱傾城に賣るからは左様の形は千枚でも。仕らんと請合ふにぞ又五郎も悦びて。詞それ女房ども吉野に其の分言ひ聞かせ。地連れて来いと懸視手形の案文取出し。詞サア此の通りと見せければ憲法披見し。ム、是では縦へ吉岡に男が有ると申しても。去狀同然の文體此の上異議は申すまじと地さらりと書き認め。フシやがて判をぞ据ゑにける。姫は誰とも知らねども廓を出づる嬉しさ

に。足も空に走り出でそも如何なる御好みに。かばかりの御情心得難しと宣へば。御尤々道すがら我々が名字仔細も語り申すべし母御姉御は河内國道明寺。尼寺に閑居の由伴ひ逢はせ参らせん。寸善尺魔の無き中に先づくお暇いざさらば。さらばくと立つ鳥の跡二五の十年一口に。思ひがけなき身請して。行くや寢耳へ見す知らぬ人に誘はれ。三重へ出で給ふ。フシ既に其の日も。紅の花を揃へて花ざろの色であかりの夜見世かや。フシ数々ともす燈火に。玉を連ね。綺羅をやる是ぞ長者の萬燈會。中に貧女の吉岡は又古へに歸る波の。替間女郎引舟を太夫仕立の衣裳つき。武士をこなしの江戸力味。フシ出立ばえして並びなし。水あけ分の口開き扇屋に先の聲かけられ。其處へ遣手の杉が来てこれ太夫様。扇屋からはお客様が見えたとして七度半の使が立つ。あたまから其の様では三軒屋の勤めはならぬぞえ。江戸風措いてもらはうと聲高なれば。吉岡はつと思ひム、お客様が見えたとは。それは誰が事此の吉岡は替間女郎引舟の約束。地粗相をいうて恥かきやんな。遣手をするなら目を開いて。フシ遣手しやれと言ひ返す。詞ア、目が明いたか明かぬか親方の言ひ付け。吉岡は當座の挨拶に客をさせまいといふとて。銀二百枚八貫六百目引舟は扱置き。地たとへ龍頭亂首でも客もせずに取りらうとは。あたゝか饒

頭米饅頭。詞そりや淺草にあるけなとあざ笑へば堪へ兼ね。ナマリ是さ長々しいごたくを述べ
るな聞きたく無いす。なまぬるつこい上方の女郎を。廻した格をつん出したら當が違ひ申すべ
い。此の吉岡がすがりの花なればこそ主達に身をぶん任する。客と寝べいなら何の僅かな銀見
度くない。親方殿も聞きなされびやく／＼客はしないさ。お江戸の傾城は水道の水を飲んで骨
が硬い。主がやうな切先の錆びた錆やり手に廻さるゝこんぢやないす。ま一度言つたらおつか
ない目に逢はす。そこつつ走つてなくなれ地／＼とフシ言ひければ。地江戸詞にきめられて流石
の遣手も二言と出ず。又五郎聞付けてヤアこれ／＼吉岡。詞今更さうは言はれまい。兄虚無僧
が手形を見よと押開き。此の吉岡丸三年傾城奉公勤め申すにつき。吉野と申す太夫と引換へに
御暇下され。吉野代りになり候上は。たとへ此の吉岡には如何やうの深き客出來候とも。連合
方より少しも構ひ申さず屹度勤めさせ申すべく候。請人虚無僧久之進。判も手跡も覚えがあ
らうと見せければ。吉岡はつと心も迷ひ繰返し捲返し。見れども讀めども紛ひなしハア、出し
抜かれた騙された。心をつくし身をつくし親をも非人の身となして。子にも憂き目を見せたる
は誰がためぞ男のため。子のある二世の女房賣つて其の代りに我が戀の。吉野とやらを請出

すとは畜生め。此の手形は去狀かヲ、去狀ならば手から手へ。直に取らうと駈出る體主夫婦遣
手も取りつき引止め。駈出づれば引止め閨に押入れ引据ゑて。各外に走り出でフシ間の戸はた
とさしにけり。地吉岡は人々の立聞きするとも知らずして。憲法染の形見の小袖。顔にあて身
につけてフシ絶え入り。／＼泣きけるが。お主の手染とありし故心の誠は此の衣に。染込みた
りと嬉しさに身は離さじと思ひしが。よく／＼思へば此の小袖吉野に遣らん爲なれど。當座の
心やしなひに我が方への偽りごと。たらされしは是故うらめしや口惜しやとくる／＼と引つ
しほり。庭へ取つてふはと投げ。力にも便りにも頼みにも樂みにも其方ばかりぞ此方寄れと。
臥したる我が子をかき寄せ／＼抱き寄せ。前後不覺の泣寝入りオタリあはれなりけるフシ有様
なり。地亭主はとつくと聞きすまし差足して戸際を退き。詞女房遣手小手招き。扱は今の虚無
僧はお尋ねの憲法。詞此の分にては後むつかし程は行くまじ追つかけて。たらして連れて歸る
べしなんほう兵法遣でも。いつでも町人染物屋。たつた憲法一匹の染賃大判十枚は。握つたも
のとひそめきて跡を。慕うて三重へ出でにける。

夢中の臙染

ウタヒ宵々にぬぎて我が寝る狩衣。かけてぞ頼む同じ世に。住むかひあらばこそ忘れ形見もよしなしと。捨てても置かれず。取るもナホス妬ましフシ腹立ち寝入り。思ひ切る瀬と切らぬ瀬の。スエテ瀬々の網代木あらはれて。深き恨みの水行く川オクリ蜘蛛手に。かゝる夢の浮き橋。夢とも分かぬ魂は。ハルフシ澤邊の螢。燃えもせず。又消えもせぬ埋火とこがれ。あこがれ〱迷ひ出で梅が香暗き。春の夜の。臘染なる。形見の小袖。袂にうつるフシ吉岡が。姿はこゝに寝姿もありし所にありくと。陰と日向と二重笠。スエテ染めて寫せし如くなり。フシ數ならぬ。美濃のお山の夕しぐれ。つれなき松も二葉より。長地雲井の枝と契りしもなぜに結ぶの神無月。色も紅葉も枯れぐに。なる身ぞつらきあだの男め。いつそ嘘なら嘘ばかり。誠まじりに絆れた。起請も反古になるならば神や佛も友達か。言へばいぶりの空涙おいてたもおいて。ノルフシ袂の雪の吹雪よの。歌吉野の花に目がくれて。流れし此の身は捨小舟ふつとやめよ。いややめまいよ。はたと撲つても叩いても。フシ憎いのうらが可愛なり。歌小面にいいいけすか。側りがざりと寝たるは。いがくり澁紙あら庭。のり立つた布に。霞笠。雁木やすりさめはだ突く様で。刺す様でしつくりほつくり寝返りうつては。フシ寝られない。閨の扇の。風の便りも絶えて三年の

あはれけに。憂き事語る友にさへ。いふにいはれぬ柳髪誰にかつけの。櫛鏡。四季の仕着せの花摺衣。單衣も手には流れの女の先の世は扱如何ならん。ウタヒ凡そ心なき草木。飛花落葉の恨みあり鳥に四鳥の別あり斯くは。思ひフシ知りながら。思へば恨みあり。思へば妬まし有りし昔の百入千入。紙に染め込む吉岡染の。よしや吉野の餘所に落ち来る瀧の水。洗はば洗へ。晒さば晒せ。胸に鋭きけんほ黒茶の眞黒くろ。黒き鋼に喰ひ付く齒形。鬼とも蛇ともならばなりなん。二人伏籠の思ひの煙昔の名香。匂變じて今の炷きがら下コハリ小野の黒木とふすぶるとも。誰にか着せん脱ぎはやらじとくるく。くるりと捲いてひらくく。ひらり。くるりと捲いつほどいつ取つつ置いつの憂き涙。ナホス主は何處に空蟬のハツミもぬけの。から衣。フシいとせめて。戀しき時は烏羽玉の。夜の衣を身に重ね。闇はあやなし梅の花下コハリ梅の梢にゆかしき人の。ありや無しやと攀ち登れば枝もさかしき劍のやり梅。フシこはそも如何にあさましや。我が魂魄の。魂は飛梅とまるは白梅。紅梅落梅。梅風順風さつ。く。さつとして夜半の鐘も埋もる。霞も。夢もおほろくと見えし姿も假枕梅が香。ばかりや残るらん。〱更くる夜の。地三番太鼓限りに屬託落居ある迄は。大門締めて客吟味フシ廊の内も静かなり。地夜番が通りし其の

跡に又五郎が門の戸叩いて。詞川口屋からでござる太夫様達でも天神でも。ちやつとお一人送らつしやれお供して参らう。地早うくと叩く音眠驚く下女子。詞あた喧しいところからぞ。お名も言はずに誰様でも女郎送れといふやうな。地素人らしいこちや知らぬとッ半分斬で答へけり。地暫くあつて又門叩き。詞今宮屋から来ました。遣手衆に逢ひ度いこゝ明けて下されと。呼ばれば腹を立てうそ眠たいに何ぞいの。詞遣手衆は皆揚屋にぢや。今時分ぶらくとなんの内なるやらうぞ。且那樣も留守なり男ぎれば少し。世間が物騒な代官殿の御用でなくば。更けて門を明けると此の中から言付けぢやと。地盗人の導きをッ教へやるこそ愚かなれ。地今度は門の戸夥しく。明けよくと叩くにぞ主の女房驚きて。先にかからしからず門を叩くは何事といふ内もなほ叩きしに女房内よりいづくより。詞何用ぞと尋ねれば小聲になり。是は代官所よりの御使。お尋ねの石川五右衛門在所あらまし知れたる故。年寄又五郎に密に牒し合する事。詞若し留守ならば内儀に逢はんとすぐばけに騙られ。ア、私すなはち又五郎女房と。門を明くればみ山のやうなる大男。兜頭巾を一樣の同類かけて四人づれ。強盜提燈提げつかくと押入つて。門口をはたとさし女房が胸ぐらしつかと取る。なう悲しやと叫ぶ口握り拳を突つ込んで。

詞いきほね立てば締殺すと俯向けにどうと蹴返し。早繩ほどき縛り上げサア。地金銀衣裳財寶の在所案内せよと。睨み付けたる眼ざしッ無體至極の仕業なり。地下女は恐れて裏口へ走り出づるを同類ども。踏伏せてさるしぱり大黒柱に括り付け。残る奴ばら刀を抜いて振廻し。傾城禿の枕の上聲を立つるな鼻息でもするならば。切殺すと閃かす刃も光る目も光る。夜着ひつかぶり今を最期の脂汗。下男飯炊は梯子の陰走りの下。土に喰ひ付き身を顛はし。念佛申す者もありッ怖しなんども愚かなり。詞中にも大將頭巾を取り。三人の者ども未だ夜のしたゝめせず。食物はいづくにある我も一つ飲むべきに。酒肴の在所サアぬかせとするりと抜く。ア、申しませうと。お飯はあの膳棚に酒はその手樽に。お菜は何も仕舞うて参らるゝやうな物ぢやなけれど。蒲鉾と干瓢の煮しめが少し。鱧の皮の炙つたも香しうてだんない物。お精進があるなら干蕪のあへ物が赤いお弁にござんする。私が膳に付いたれど片脇せつゝたばつかり。地ほんに昨夕お出でなされたら他所からお秋が来たものをと。追従言はば助かると。ッ下女が心ぞ哀れる。同類ども居ながれて思ふさまに食ひながら。詞やれ女め喧しいと睨めつくれば。あの様達の目許わい御器の中から人見さんす。地ぬすもじ様の根本ぢや何も無くともよう上つ

て下さりませ。お茶はあれども盗人にお湯が薬罐やくかんにしやりくと、フシいうても繩は解かざりけり。地酒食しまうて樽も椀も踏みちらし。サア来いと主あるじの女房繩引つ立て。詞外は入らぬ錢も重たい。金銀と衣裳はどこにあるぞと。地連れありく。命に代ゆる寶はなし何しに隠し申さんと。貯への金箱金袋衣裳箆かばつら革葛籠。持出し、積み重ね。詞もうよいは、十分は却つて一分。亢龍悔ありといふ事石川が家の大事。我是を守る故一度も盗み仕損ぜず。寅の刻より一陽兆す陽は顯れ陰は隠る。ぬしに利あるぞ時移すな。海手の水門より次第々々に持つて退け。承ると同類ども打擔うちかたけ提げ。懐ふところに捻込んで我もくと持運ぶは、フシ水をかゆるが如くなり。詞石川どうど座を組んでこれ女房。此の家に吉野といふ新造あらう。是はもと歴々者。此の五右衛門が師匠につき由緒ある姫なれども。不慮に出合ひ誘拐きどわがし肝煎頼んで賣つたれども。銀を取つて了つたれば又此の姫は故郷へ歸す。サア呼出せと言ひければ。いや其の吉野は身請して。地今日の晝廊ひるくらわを出し候と。言はせも果てず又ひん抜き嘘うそをぬかすか是なるぞと。刀を咽のどに差當て。なんと吉野を渡すまいかと責め付くる。詞此の上に傾城一人惜みて何になり申さん。しかも請手は虚無僧こもそう久之進とやら。跡で聞けばお尋ねの憲法。江戸吉岡といふ太夫の果と引換へ。銀な

しに取遣りし其の吉岡は奥の間に。地是が證據南無阿彌陀なんむあみだ南無阿彌くとぞ顛ひける。地吉岡と聞くよりも奥の間に駈入りて。見れば江戸山谷さんやにて見し吉岡に違ひなし。夢に驚き襲おそはれ苦しむ其の息いきざし。吉岡殿くと揺り起す。むつくと起きて髻たゞやをおつ取り。詞心の變つた男め何の面恥つらばち生畜生と。頬がまちははたと打ち小束こつかを掴み引捲り。大の男を引寄せくと。喰く付き叩き恨み泣き流石の五右衛門もてあつかひ。あいたくと。詞これ夢見たか吉岡殿。目を覺して下されと手を合せてぞ拜みける。地吉岡やうくと心付き。ヤア五右衛門殿かいなう此方こなたを見ても恨めしい。彼の人ゆるゑに目を煩わづひ其の身に此の子を苦勞して。袖乞非人の業わざをもし舉句の果に吉野といふ端傾城。兄嫁の妹を五右衛門が賣つての何のかのと。手管てくだをして置替おきかへに逢うて吉岡は。元の三途さんづに歸つたとフシ膝ひざに。もたれて泣き居たり。詞五右衛門かくては叶はじと。エ、吉岡とも云はれし人の。世につれて氣が僻ひがんだ。吉野といふは和琴の前命に代へても廓くわを出すと常々の念願遂とげられしと覺えたり。さもしい氣を持つ且那ぢなでなし尋ね逢うて聞届きとどけば。恨みも憎みも晴るゝ事只今で五右衛門が。定つた宿もなく山の奥谷蔭を家居とは致せども。地明日は如何なる大名とも見せかけ。槍引馬やじりうまで本陣宿ほんじんしゆくに泊らうとも。大商人の眞似をして手代數多に銀

荷を引かせ。詞問屋の馳走にあはうとも自由自在の所在とは強盜。もと兵法を覚えし故旦那志法殿の御高恩。所縁の末にも疎略はなしいざお供して退け申さん。地先づ若旦那は此方へと背中に差向けしつかと負ひ。抱へ帯にて二三重我が胸に結はへ付け。吉岡の手を引いて既に出でんとせし所に。同類の退きはをかり舟が見付け出し。辻番より内通し廿騎組の夜廻り二頭裏町を押破り表の格子をおつ取り巻き。一番手は門口をこぢわり入らんとひそめきける。詞石川眉を顰めやら心得ぬ胸騒ぎ。大強盜小盗みかけて屋尻押入り騙り追剥ぎ。千七百餘度の働き一度もかゝる覚えなし。必定捕手が向うたな。折しも引汐進む方に利あらず。地何事かあらん月入る方に立退かんと。西裏へ駈出づれば塀の後に纏を立て。槍標ひらめいたり吉岡はつと腰も抜け。絶入るばかりに見えければ石川も吉岡の。足手纏ひに氣後れし膝もわなく、胴顛ひ。途方にくれて立つたる所に門押破つて。一番手。詞捕つた〜〜〜地捕つた〜〜〜と入る所を。縛りし下女を小楯に取り遣り過して後より。大袈裟に切つて切下げたり。隙をあらせず二番手が取つた〜〜と喚いて入る。兩眼拉ぎのをがみ討ちフシ肩間を二つに割りてけり。地一騎打には敵ふまじ備へを亂して込入れと。三番四番五番手が。捕つた〜〜のやごゑをかけ切入らん

とせし所を。石川火掻きおつ取りのへ籠の灰を抄ひかけ〜霧や霞と渦捲けば。捕手の者ども目も眩み込入つては走出で。追うつ捲くつつ揉み合ふ所を臍節肩骨きらひなく。さんぐ〜に切つたるは宛ら軍の三重〜如くなり地夜廻りの物頭。詞醒が井民部左衛門只一人の盜賊に大勢が切立てられ。裏手の者に捕らせては腹を切るより外はなし。地我切留めて高名見せんと羽織を脱いで扒着込。鎖の鉢巻頭巾おつ込み。捕つた〜〜と聲をかけし〜〜とこそ入りたりけれ。石川が謀略押入戸棚に身を半分。見せて隠るゝ智略を知らず通すまじとつと入り此方の戸口へひらりと抜け入替つて兩方の襖をはた〜とさしもの侍籠の鳥。襖越しに兩方より刀を突刺し突通し。盲突きに突合ひしが外は明し内は闇。石川は手も負はず民部左衛門數箇所を突かれ。襖戸も朱に染み。のた打ち喚く聲ばかりフシ終に最期と見えにける。地いで立退かんと思へども人數四方に充ち満ちたり。石川も詮方なく縛りし女房引寄せ。盗人は二階より屋根越しに抜けたると。聲をばかりに呼ばはれさなくば是ぞと切先を。胸に押當て引きすり廻る女房大事と大聲あけ。詞あれ盗人は二階から屋根へ抜けたそりやく〜と。地呼ばはる聲に裏表はつと散つて亂れ立つ。詞弓矢は無きか射て落せ梯子出せと騒ぐ間に。地子を負ひながら石川は

走り出でて辻々の。此處ではそりやく盗人よ彼處ではそれ其處へ。ありや盗人よと大聲あけ驚かせば驚きて。町人も侍も西の方へはむらく。東の方へはむら。くくむらく。鳥鳴き渡る。ほのくあけの朝霞人目。かすめて退きにけり。

法の足駄

下之卷

フシ 立ち舞ふべくも。あらぬ身の名もうとましき舞樂の前。妙莊嚴の跡追ひて。母も勸むる法の道。フシ夫は何とか難波瀉。短きあしの節の間も。世々の報いを晴さんと。スエテ我も足駄の行人や。頂く桶は千代能が。オクリこれも。昔の跡とめて。ノルフシ水たま。らねば月影も。やどり定めすいづくにか袖をしきみの。フシ露をくぐ。地經木の回向とりわきて。乳房の母よ父のため。有縁無縁の鉦打鳴らし。ギン引。歌南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。彌陀のナホス御國をフシ頼む身は。生れし里の住居さへ。宇陀の郡を立出でて願ひの道も明けき。道明寺へと修行ある。フシオクリ親子の。さまで。殊勝なる。フシ振返り見る故郷の空。何を恨みて墨染の。烏が獄の山の名に。まだ寝ても見ぬ。フシ曉の。別れ苦しき鐘の聲初瀬の。花はさもなく。スエテ我に激しき山おろし。ウタヒ杉の下風杉間吹く。三輪の神代の謂れを聞けばオクリ是も。姫神殿神の畫

をば如何で烏羽玉の。セツフシ夜の契りのきぬ。くくのウタヒ歸る所を知らんとて。苧環に針をつけ。裳裾に是をとちつけて跡をナホスひかへてフシ慕ひ行く。まだ青柳の。いと長く結ぶや早玉の己が力にさゝがにのハツミ絲くり。返しフシくり返し。かへり三笠山。フシ大佛殿を伏拜み。見渡せば奈良の京。けに古への都とて春の錦とこき交し。柳櫻の八重がさね。疊み込めたるつら山。つら小笠や。菅の小笠にはらり。ほろり。はらほろく。こほれかゝるは雨か霞か。歌雨で。ないぞの百千鳥の。鳥の羽風に。フシ花の露袖に。落ちては。とけやら。ぬ今も涙の。こほり山。天香具山白妙に。フシ霞たえく。當麻山。木々の若芽も。夏近く淺黄水色空色の。長地花の帽子のかけ残す中將姫も我が如く。繼母の心。濁り江の。濁りにしまぬ蓮の絲レイセイひかれ。結ばれユリ。引取られユリ。救ひ取られて紫の。雲に入るとふ雲雀山。ハツミあがる雲雀や。啼く雉子。地歸る雁がね飛び来る燕。己が様々とりくの憂き世のさまも思はれて。春の野邊こそ長閑なれ高嶺の花は散りそめて。青葉蔭れに一輪二輪。残る丸輪の塔の峰。跡に隔てて。風吹けば。沖つ白波立田越。下りて降りて見上ぐれば日影も空にほのぐもり。フシ雨の笠置の山越に。彌陀の御光と拜むには上求菩提も頼もしく。籠に法の花田村。願ひ深江の寺近く。下

化衆生の回向の種南無阿彌陀佛みだ佛と。手向くる露の一雫三界六道残りなく。普く咽潤して。ぢ。ごくの猛火すしむる。法の冷水求め来て道明。寺にぞ三重々着き給ふ。地そも河内の國道明寺は。忝くも菅丞相の御叔母君。道明尼公の古跡とて千歳の後も松梅の。墨の衣の尼寺にて天満宮も遷ります。現世といひ後世の種。誠に殊勝の靈地なり。舞樂の前親子の人。豫てしるべの便してかくと案内し給へば。住持の老尼立出で給ひ。能くぞくいつぞやより發心のお望みとの音信ゆる。極樂世界の友待ち兼ね今日かくと存ぜしに。地嬉しき親子の思ひ立ち何暗からぬ御身にて。菩提の道に入り給ふは是こそ誠の道心にて。佛も悦び給ふなれそれにつき。詞一昨日の暮方。虛無僧一人若き姫御前伴ひ。龍門殿の姉姫母御は當寺にましますかと。尋ね來り給ひし故未だ是へは見えねども。かねく其の案内にて近き中に御出での筈なりと答へしかば。然らば此の上藤引合せてくれよとて。地當寺に預け其の身は直に歸られしと語り給へば親子の人虛無僧は知らねども。上藤とは若し妹か逢はせてたべと歎かる。聲を聞付け和琴の前なう母上か姉君かと。駈出で給へばやれ生きて居たか我々も。まだ死なぬわとばかりにて親子三人手を組みて。フシ暫し。涙にくれ給ふ。稍あつて和琴の前石川五右衛門が手に

渡り。三軒屋へ賣られし次第憲法の情の義理。詞吉岡の身をかへて廓を遁れし憂さ辛さ。地語ある。フシ菩提心こそ殊勝なれ。地住持重ねて近頃頼もしうこそ候へ。詞扱當寺には毎月廿五日攝待供養を執行ひ。參詣往來に茶を施す初發心の沙彌尼の役。あの大釜を洗ひ磨き水を汲み茶を煎ずる。皆様は大名の姫君達とは申せども。寺法なれば黙されず天満宮への御奉公。地面々後世のためなれば御苦勞ながらとありければ。檀特山の法の水法の薪と存すれば。何か苦勞に候はんと襷袢取りかひんしく。佛に仕ふる修行のさま。フシ尊くも亦いたはしし。地かゝる所に泥まぶれなる大男。三歳ばかりの子を負うて息をばかりに駈け來り。詞借錢に乞ひつめられ所を駈落致す者。負せ方が追つかくるお比丘尼様達頼みます。地影を隠して下されと運盡きぬれば威も落ちて。虎に似たりし石川がフシ身の成る果ぞあさましき。地テ、痛はしけれども寺とても間處なく。詞三疊敷の部屋々々は隠しがひもあるまじ。在所の内で百姓衆頼んで見やとありければ。近郷の在々迄おこしかへつて追つかくる。我等ばかりは兎も角も此の子が命助くるため。地何になりとも隠れ度しと覗き廻れど隠れがなく。攝待の大釜の蓋を明けてこれく。

天の助け有難し沙汰遊ばして下さるなど。飛び入つて身を潜め内より蓋をかき寄せて。佛の慈悲と悦ぶも、フシ地獄の釜とぞ成りにける。地津の國河内兩國の武士。豫て王命蒙り見付け出せし事なれば。在々の百姓かり催し夜廻りは吉岡に。繩をかけて一手になり梅の林を捜し寄せ。寺内へどつと込み入つて道心尼の部屋々々より二階天井椽の下社壇の内迄捜せども。行き方のあらざれば追手も今はあぐみ果て。地森の四方を取巻きしが。宙を飛んで逃げけるかとフシ各。あきれて休み居る住持を始め弟子達も扱は重き科人。されども目の前殺生なり。助けばやと目くばせし籠を取捲き立ち給ふ。物馴れたる侍。大將組頭。籠を隠すに心を付け。十人餘り領き合ひ聲を合せてつつと寄り。四邊の比丘尼を取つて突退け立ちかゝつて釜の蓋。一度にどうど押ゆれば中にわつと子の泣く聲。サア是に在るには極つたり釜を搦めよ心得たりと。雑兵百姓我劣らじと大石を重りにかけ。大木伐つて十文字繩よ鎖とひしめいて。八重むしんからけしはフシ網をかけしに異らず。地住持も今はかなはじとなう如何なる科かは存ぜねども。神前といひ寺の庭。殺生戒も勿體なや。さり乍ら罪ある人助けてたべとは申すまじ。せめて稚い子の命此の尼に御芳志あれと。拜み給へばなう尼せ。詞彼奴は石川五右衛門といふ盜賊の張本。天下一

統大事の囚人。此の倅に科は無けれども。倅を出せば五右衛門を取放す。蓋を取らねば倅とも出されず。地是非に及ばず同罪叶はぬくといふ聲に。吉岡わつと泣出しなうお比丘尼様尼御様。あの子の母は自ら吉岡と申す者。悪い所に居合せて擧となつたが身の因果。語れば様子もある事先づくあの子の命を。申し受けて助けてたべ。今生後世の御慈悲とフシ聲を。ばかりに泣くも。姫君姉妹世を憚りそれぞとも名乗りもせず。住持の尼も詮方なく。皆々是はとばかりにてフシ泣くより外の事ぞなき。追手の武士も此の上は吉岡に科はなし。落着迄は此の者に預け置くぞと繩切り解き。サア此の釜を直に京都へ送れやと昇き上ぐる。吉岡は今一度聲なりとも聞きたやと。取付けば拂ひのけ。立寄れば追つ拂ひ。先を拂ひの警固の聲母は悲み叫ぶ聲。あらかしかまし釜の蓋いつか明くべき七月の。十六日も程遠き都を。さしてぞ三重上りける。地頃は慶長庚戌。暮春の天も明けきフシ國制遁るゝ所なく。詞強盜の張本石川五右衛門自縛にかゝり擧となる。此の者飛鳥の術を得て空をも翔る曲者なれば。地取放しては不覺なりと牢屋へも移されず。憲法が一子諸共に元の釜に入れながら。蓋に小さき穴を彫りて食事を與へ。頭ばかりを差出し在るにかひなき好癖の。其の日くと存らへて既に今月今日の。釜煎

の。刑にぞ極りける。地洛陽七條河原方三町に大垣を結び廻し。大鐵輪に釜を据ゑ蓋も重りの大磐石。同じく銅の筒を通して油を注ぎ込む漏斗とし。油樽を積み重ね周圍に薪。炭俵。檢使の棧敷横目の幕。杖つき棒つき刑部職の下司。數百人立並びすは時刻ぞと呼ばはる聲。洛中洛外近國隣郷見物群集の念佛の聲。拔身の兵具日に映じ諸人の氣骨を驚かす。己れが罪と云ひながら。例少き刑罰とフシ皆魂をぞ冷しける。地道明寺の住持龍門親子大炊入道。片足駄にて母引具し吉岡諸共七人連れ。諸見物を押分け檢使の前に一通の訴狀を捧げ。とかうの言葉もいはずしてスエテ伏沈みたるばかりなり。祐筆訴狀押披き高らかにこそ讀上げけれ。地道明寺の老比丘尼等恐れながら言上。傾城吉岡が愛子久吉。盜賊石川五右衛門同罪の御縛め歎きても餘り有り。愚母吉岡渡世のため三軒屋に身を寄せ候刻。彼の五右衛門強盜をうち候。凡そ萬人に知らるゝは遊女の習ひ先年關東山谷に於て。一座面友の好みによつて彼を帶し落失せ。共に釜中に囚れ候。假令父母によつて御科の仔細ありといふとも三歳の幼稚何ぞ其の科に與るべけんや。重罪遁るゝ所なくんば各七人の首を刎ねて一子の一命に代へられば。生前といひ萬劫の御慈悲たるべ矣。地依つて訴狀件の如し老比丘尼道林龍門の後室。同じく娘舞樂の前。同じく妹和琴の前。香春大炊之助入道同じく老母。久吉が母傾城フシ吉岡判とぞ讀上げける。檢使の人々聞き給ひ。近頃不便の事なれども。前代未聞の科人と一所にありしは罪なしとも言ひ難し。其の上父の憲法が禁中にて狼藉御穿鑿眞最中。地かれ是遁れぬ俸が因果地獄の釜と思ふべしと。涙ぐみ宣へば吉岡力も落ち果てて。扱はふつと叶はぬかよし此の上は此の母も。一つ釜に煎り付けてせめて我が子の苦しみを。母にも分けて見せ給へとスエテかつばと伏して泣きければ。残る人々聲に。我々も共にせめてたべと。聲も惜まず泣き給ふはフシ目もあて。られぬ風情なり。地時刻移るそれくと禪かけたる役人ども。油を釜に注ぎかけく下には薪炭火をおこし。煽ぎ立てたる黒煙外より見るさへいぶせきに。中で焦るゝ苦しみの幼心の不便やと。見物貴賤老若も目を塞いでぞ念佛す。やうく油に火氣移れば釜の穴より五右衛門。首を差出し莞爾と笑ひ。調ヲ、夥しの見物や。此の大勢の見聞衆に今五右衛門が油責。釜煎に逢ふを見てよい氣味と悦ぶ人可突しと笑ふ人。地憎しともいひ不便とも様々評議あるべきが。それは皆僻事面々我が身の師匠ぞと。思つて念佛フシ頼むぞや。調某は日本國に古今無雙の盜賊なれども。巧んで是を始めず。我人盜みの始まりは。自然と先から持つて來て盜めと言はぬばかりなもの。地其の堪忍が

佛の手引そこを堪へず盗み取る。それこそ天魔の導きなれ。調桶の大木も二葉の時は童にも摘み取られ。己がまゝに茂つて後は石となる。盗みとても其の如く。地始めに思ひ止まらねば次第次第に増長し。止めん／＼と思へども下る車を追ふ如く。車は早く心は跡。悪に追付く善心なき。これ人界の習ひなり。我が盗みはもと主君のため師匠のためと思ひしが。盗まれた人々も主の物師匠の物報い積つて油責。地我が身ばかりか主師匠の子を同罪に煎りつくる。是程近き罰利生ありと知らざる石川が。愚痴といふ病より恥を曝すあさましやと。鬼のやうなる眼より。スエテ涙を。流すぞ哀なる。地エ、よしなき長口上そろ／＼油へ火も廻る。轉倒の戯言と笑はれんも恥かしし。さり乍ら世上の人無用心から盗みに逢ふ。盗人は憎き人用心せぬはたはけ人。詞人に違ひはなけれども皆一心のなす所。地五右衛門が辭世の一首の歌を聞けやとて。石川や。濱の眞砂は盡くるとも世に盗人の。種はつきせじ。火坑變成池南無阿彌陀佛。皆々念佛頼みますと。ッ首引き。入れし其の跡へ地幼き者は顔出し熱い／＼と泣きわめく。母は生きたる心なくなう久吉かいとしやなう。十惡五逆の科人さへ慈悲の上には助かるもの。西も東も知らぬ子が何の科してあの責ぞや。諸萬人の方々命を貰うて下されと。聲をあけて泣きければ聲固の武士も見物も。七條河原一まいにスエテわつと叫びし。其の聲はッ天にも響きてあはれなり。地釜の中より五右衛門が引込めば顔出し。引入るれば顔出し熱や／＼と二三度は悶えしが。地コハリ次第に猛火盛んにして薪の煙炭煙。油の沸く音ど／＼／＼。煎り付けば又注ぎ入れ油煙雲に渦巻き上り。蓋の隙々迸る油は宛ら熱鐵の。つら／＼を下けたる如くにて重りの石もどろどろ／＼。躍り上るばかりなる焦熱地獄大焦熱の。苦しみも地目前に。ッ恐しかりける有様なり。地かゝる所に憲法は遠坂舍人を宙に引つ立て。飛ぶが如く檢使の前に大息つき。詞お尋ねの憲法久太郎と申すは拙者が事。石川五右衛門は盜賊なれば釜煎も鍋煎も御勝手次第。釜の蓋を明けたならば五右衛門が逃げうかと。科なき悴を同罪は何事ぞ。但し此の憲法が代りならばサア地本人が罷出た。拙者を如何なる科にも行ひ。悴を元の如くにして請取り申さん。詞殊に某禁中にて。狼藉致せし起りは此の舍人。地彼奴が科をも糺明なくては御政法は立ち申さじと。血眼になつて理窟をいふ詞の中にも釜の中。我が子の方を尻目に見てスエテそ／＼に涙を流しける。詞檢使の人々聞き給ひ。尤悴に科なしと雖も。御邊の在所分明ならず親に子を代へ。刑罰に行ふ事其の例無きに非ず。地今は悔みても益なき事一子が追善供養のため。龍門一家兄大炊

之助本領安堵我々命に代へ。宣旨を願ひ下すべししやつは聞うる大悪人。上へは申すに及ばず心任せに致されよと。詞をつくし教訓あれば鬼神を拉ぐ憲法も。兄の出世に納得しフシ差俯向いてぞ居たりける。地最早息もあるまじき蓋を開けて死骸を出せと。鐵挺にて大石撥ねのけ大勢熊手差伸べて。蓋引き外せば油煙四方を晦らませる。中より五右衛門焼け爛れ。ぬつと出でたる有様はフシ凄じくも亦哀なり。憲法聲をかけこれく五右衛門。死の縁無量是非もなし。大事は最期の一念。地悴が苦しみ不便やなせめて死骸を一目見て。此の世の名残と泣きければ釜の底を掻き搜し。煎り焦れとろけたる死骸を掴んで差上ぐる。憲法も吉岡も二目とも見られもせず。わつとばかりに伏沈みフシ絶入り。く歎きは。目蓮尊者の愁歎も。是には如何で優らんとフシ見る人袖をぞ絞りける。地涙の隙より諸見物師匠といひ主の子を。膝の上に抱きもせず石川程の者なれども。最期には氣も亂れ熱さに堪へ兼ね主の子を。下に敷いたるあましましやとどつと笑へば。詞今を最期の石川眼をくわつと見開き。やいあんだらの大馬鹿ども。此の子を下に敷いたるとて命生きる五右衛門か。主の子なれば悼しさに苦痛をさせず殺さんと。思つて下に敷いたわやい。骨まで徹る煮え油に煎りつけられて。此のやうな思案が出るもの

か出ぬものか。己れ等こゝへ入つて見よ仇口ぬかす其の口で。念佛頼む地南無阿彌陀。南無阿彌陀佛とばかりにてフシ遂に空しく成つてけり。地ッ憲法今は是迄と叔父の舍人を引つ掴み。二人が最期の供せよと煮え立つ釜に打込んだり。何かは以てたまるべき煮え上り沸き返り。骨もとろけて失せたりける直に二人の追善の。大法事大吉事本國本領出世あり。瀧に登るや龍門の家も繁昌國繁昌。民も賑ふ釜が淵底の知れざる大福德。末吉岡の憲法染洗へど。落ちぬ富貴なり。

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

竹本筑後掾

本竹

教博

近松門左衛門

大阪高麗橋壹丁目

正本屋

山本九兵衛版

山本九右衛門版

近松門左衛門全集第六卷終

大正十二年三月廿五日印刷
大正十二年三月廿八日發行



(近松門左衛門全集第六卷)

定價金貳圓五拾錢

編纂者

高野辰藏

發行者

和田利彦

印刷者

土谷清隆

印刷所

株式會社博文館印刷所

發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地

春陽堂

振替東京一六一七 電話本局五十一四二一〇

圖書目錄贈呈……往復葉書にて御申込次第・春陽堂

高野斑山氏校訂
黒木勘藏氏

三六判布表装天金本

近松門左衛門全集 全十卷

各卷 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢

此全集の

輯集の豊富……淨瑠璃と歌舞伎狂言と合せて百四十篇、其三十篇は未
翻刻の珍書。
歌舞伎狂言本十六篇……近松の作の一面を示す貴重品。本全集の誇
底本は古刻……一切古正本に據り、異本を参照して、従前の翻刻書に
基かず。
校正の嚴密……假名遣の訂正、佛語漢語に對する用字の正格（但訛語

七大特色

方言は元の儘）句切及び曲節附の保存。
挿繪の珍貴……繪入細字本及び狂言本から採つて、毎卷挿入十數葉。
場面観察の好資料。
作品の排列……内容と傍證とによつて、新に立てた時代順。最も苦心
の存する處。

研究の手引……劇の歴史、作者の傳記、著作の解説。（序卷）

序卷

義大夫劇の日本劇史上に於ける地位、近松門左衛門の傳、著作年表、著作の解説並
に梗概。

第一卷

元祿四年迄

花山院后評、赤染衛門榮花物語、つれづれ草、世繼會我、伊呂波物語、門出八島、
凱陣八島、源氏烏帽子折、百夜小町（狂言本）、夕霧七年忌（狂言本）、出世景清、三
世相、佐々木先陣、會我七以呂波、天智天皇、十二段、水木辰之助錢振舞（狂言本）、
大覺大僧正御傳記、東山殿子日遊、戀塚物語。

第二卷

元祿十一年迄

念佛往生記、本朝用文章、日本西王母、摩耶山開帳(狂言本)、今川了俊、松風村雨束帶鑑、釋迦如來誕生會、鎌田兵衛名所盃、傾城阿波鳴門(狂言本)、賴朝伊豆日記根元會我、團扇會我、當流小栗判官、一心二河白道(狂言本)。

第三卷

元祿十五年迄

一心五戒魂、傾城佛の原(狂言本)、阿彌陀池新寺町(狂言本)、浦島年代記、姫藏大黒柱(狂言本)、傾城富士見里(狂言本)、下關猫魔達、蟬丸、天鼓、會我五人兄弟、大磯虎稚物語、賀古教信七墓廻、傾城壬生大念佛(狂言本)、主馬判官盛久。

第四卷

寶永三年迄

傾城三の車(狂言本)、最明寺殿百人上臈、會根崎心中、唐崎八景屏風(狂言本)、薩摩歌、吉祥天女安産玉(狂言本)、雪女五枚羽子板、用明天皇職人鑑、源義經將基經本領會我、加增會我、心中二枚繪草紙、兼好法師物見車、基盤大平記、卯月紅葉。

第五卷

寶永七年迄

會我扇八景、吉野忠信、堀川波鼓、卯月の潤色、酒香童子枕言葉、心中重井筒、傾

城反魂香、心中萬年草、丹波與作待夜小室節、淀鯉出世瀧徳、五十年忌歌念佛、御曹司初寅詣(狂言本)、桒狩劍本地、會我虎が磨。

第六卷

正徳二年迄

今宮の心中、百合若大臣野守鏡、心中又は水の朔日、孕常盤、源氏冷泉節、冥途飛長、吉野都女楠、大織冠、夕霧阿波鳴門、傾城懸物揃、弘徽殿鷄羽産家、廻山姥、脚町女腹切。

第七卷

享保三年迄

傾城吉岡染、天神記、察靜胎内拮、相模入道千匹犬、娥歌加留多、嵯峨天皇甘露雨大經師昔曆、持統天皇歌軍法、生玉心中、國性爺合戰、國性爺後日合戰、槍の權三重帷子、聖徳太子繪傳記、山崎與次兵衛壽の門松。

第八卷

享保六年迄

日本振袖始、會我會稽山、傾城酒香童子、日本振袖始(狂言本)、博多小女郎波枕、善光寺御堂供養、本朝三國志、平家女護島、傾城島原蛙合戰、井筒業平河内通、雙生隅田川、日本武尊吾妻鏡、心中天網島、津國女夫池。

第九卷

享保九年迄及び補遺

女殺油地獄、信州川中島合戰、唐船嘶今國性爺、心中宵庚申、關八州繫馬。此の他未翻刻書七八篇

紅葉全作集

尾崎紅葉氏著

合判七五〇頁位美本
各貳圓五十錢送料拾八錢

本集は明治文壇第一の巨匠として我が國文學史上に不朽の名を刻まれたる尾崎紅葉氏の全作品を収録せるものである。氏が、江戸藝術の精粹を捉して、渾然たる新文藝を建設し、我が文運に新生命を與へたその功績は、紅葉氏の所謂「七度生れて文章のため盡さん」と云ふ包懷ありて始めて得べきものであつた。

- 第一卷 多情多恨、夏瘦、關東五郎、むき玉子、新色ざんげ、手引の糸、命の安賣。◇第五版
- 第二卷 三人妻、女の顔、花ぐもり、浮木丸、西洋娘氣質、煙霞療養、偽金、わかれ蚊帳。◇第五版
- 第三卷 伽羅枕、男心、此のし、戀の病、文ながし、千箱の玉章、草紅葉、八重櫛、伽羅物語。◇第三版
- 第四卷 寒牡丹、おぼろ舟、安知歌不林、不言不語、紅白毒饅頭、油柄杓、新油柄杓、心中船。◇第三版
- 第五卷 隣の女、青葡萄、夏小袖、心の闇、冷熱、紫、東西短慮又、茶碗割。◇第三版
- 第六卷 金色夜叉、銀、鷹料理、三箇條、猿枕、湯の花。◇第三版

終